

専門職倫理としての技術者倫理の構築とその問題点

伊勢田哲治(名古屋大学)

日本で技術者倫理を構築する上で一つの大きな問題として繰り返し論じられているのは技術者倫理を専門職倫理の一分野として位置づけることが望ましいのかどうかという問題である。本発表ではアメリカで専門職倫理としての技術者倫理が発達してきた経緯を検討し、それを日本の現状と比べることで、日本には本当に専門職倫理としての技術者倫理は適していないのか検討を行う。

特定の職業に属する者だけが拘束される職業特定の倫理基準はギルドや株仲間の規則という形で近代以前から各国に存在しており、この時期には日本と欧米でそれほど差があるわけではなかった。また、医師という古典的専門職も日本にも存在していた。高等教育機関で技術教育をうけたいわゆる技術者 (engineer) の集団が19世紀に登場したという点も、数十年の落差はあるものの基本的には同じである。しかし、アメリカにおいては技術者の集団が技術者協会を結成するという形で専門職化していったのに対し、日本では技術者集団は学会という形をとって、職業的な団体とはならずにきた。

アメリカの技術系協会においては、20世紀に入ったころから倫理綱領が制定されるようになる。当初は顧客や同業者を配慮の対象とする倫理綱領であったが、公衆の安全を最優先する倫理綱領へ、そして近年では環境への配慮なども盛り込まれて行く。取り組みとしても、1970年代以降、技術者の倫理的行動を支援したり、技術倫理教育プログラムを開発するなど、技術者団体が積極的に倫理にかかわるようになった。ABETの認証において倫理教育を要請することができたのは、そうして積み上げてきたものがあるからにほかならない。これに対して日本ではそうした積み上げがないところで、技術者倫理教育を行うという最後の結論だけが輸入され、かなりの無理を伴いつつ実行されてきた。

そうした無理を解消していくひとつの方法が、技術者倫理の背景となる、専門職としての技術者、というありかたを日本に移入することである。欧米社会における専門職というものの特徴として、高い社会的地位や尊敬との引き換えに社会に対して高い倫理基準を維持したサービスを行うという暗黙の契約の存在がある。技術者側が専門職としての高い地位を要求することは、単なる利権団体化であるように見えるかもしれない。しかし、技術者の専門職化とそれに伴う高い倫理基準の維持は技術者と社会の双方にとって望ましい結果を産むことが期待できる win-win 戦略であり、技術者の側も悪びれることなく専門職としての地位や特権を要求していくべきではないだろうか。

しかし、技術者の専門職化にはいろいろな疑念がこれまで呈されてきていた。技術者が医師や弁護士といった古典的専門職と違って人間を直接相手にする仕事でないということは専門職倫理として技術者倫理を考える妨げになるだろうか。また、日本の技術者が会社に対して強い帰属意識を持つということは専門職倫理としての技術者倫理を発達させる妨げになるだろうか。アメリカで100年以上かけて培われてきた専門職としての技術者のありかたを日本に短期間で導入することは可能だろうか。

本発表では、以上のような指摘が専門職モデルの日本の技術者への導入の妨げとなるかどうかを検討する。それと同時に、導入に時間のかかる専門職モデルにかわってもっと短期間で倫理意識を高める効果を期待できるようなモデルは存在するかということについても考察する。